

戦時性的被害者の設定に見る丁玲の意識変革

— 「新的信念」と「我在霞村的時候」との比較をめぐって—

高媛

1. はじめに

1939年に中国の作家丁玲(1904～86年)は西北戦地服務団を率いて慰問の際、彼女は前線で抗戦の中で弱者、とりわけ女性が大きな犠牲を蒙っていることを見聞した。これらの「女性犠牲者」を作品にしたのは「新的信念」¹(以下「信念」と略す)と「我在霞村的時候」²(以下「霞村」と略す)二篇がある。

「霞村」が「性的被害者」を描いた作としてよく知られているのに対して、「信念」は二年前に書かれた、戦時性暴力の多様な形を扱っているにもかかわらず、日本でも中国でも「霞村」ほど注目・評価されていない。その両作品の評価に開きが出る理由の一つとして、「『信念』に重大な誤訳(日本側)と削除(中国側)のあることが大きく影響している」³と考えられる。また、作品全体が「『日本軍暴行と抗日戦争の視点』に沿った、ナショナリズムのプロパガンダ的な『語り』となっている」⁴点は、この作品評価の低さにつながっていると指摘されている。その一方、小説自身に対して、「伝統的な貞操意識と倫理意識から抜け出し、国家存亡を念頭においている」のような指摘は、これまでの先行研究⁵において一般的である。それに対して、村人の奮起の描き方について、「安易に過ぎる点はこの作品の欠点だが、その欠点がありながらやはり『戦慄的な感動』を呼ぶ成功作と成りえている」⁶と岡崎俊夫の指摘である。

その一方、50年代の「丁玲批判」⁷においては、丁玲が国民党に南京で監禁されていた際の「転向」問題が取り上げられ、「転向者」とされた丁玲と、「霞村」の主人公とを重ね合わせて論じられた⁸ことがあった。そこには当時の政治抗争がからんでいたが、こういった読み方が中国ばかりではなく、日本でも一定の共鳴を生んだことは、この作品である一面を浮かび上がらせたものであると言える。また、「霞村」は、特に丁玲の「転向」を説明するのによく援用される。そして、「霞村」は抗戦期における女性と政治との関係を討論する絶妙な素材として、また日本軍の慰安婦にされながら、味方のために諜報活動をする

少女貞貞の形象は毀誉褒貶を交えつつ様々に議論されてきた。彼女は過酷な環境に屈せず抗戦に立ち上がる英雄と賞賛される⁹。その反面、「民族の貞節」を日本軍に踏み躪られた恥ずべき女とも非難された¹⁰。最近では、フェミニズム文芸批評理論による丁玲文学の再評価が流行っている¹¹。

しかし、この二本の小説を並べて読む時、最も驚くのは、同様に抗日戦の犠牲者である女を主人公としながら、彼女たちを取り巻く状況と彼女の再生の道の描かれ方が、逆転とも言うべき落差を示している点にある。二本の小説にある「落差」について、江上幸子は当時の政治状況に根差し、「信念」時期の丁玲は、抗日を最優先課題と考え、人々が抗日に立つ中で意識を変革することに、期待を寄せていた。だが、「霞村」の時期に至ると、こうした状況認識に変化が生まれ、楽観的であった心情が次第に危機感を伴うようになった¹²という理由を論じている。ところが、同じく性的被害者としてこの二人の女性像を通して、丁玲が自らの意識変化をいかに小説の中で投影しているか。また、同じく性的被害を経験した女性であるにもかかわらず、周囲から正反対に扱われている二篇の作品を正反対の設定にすることによって、作者丁玲はいかなることを伝えようとしているかについて、今までの先行研究にほぼ言及されていない。

そこで本稿では、「信念」を「1936～39年」期に分類し、「霞村」を「1940～42年」期にするという従来¹³とは異なる時期の分け方をし、それぞれの時期に丁玲の意識変革の筋道を捉える。創作時期わずか2年の隔たりしかないこの二作品を比較し、それぞれの物語構造設定の必然性について新たな解釈を試みる。また、日中戦争時という時代背景において、多様な人間性を描くという丁玲文学の深い豊かさをさぐる。

2. 延安時代

2-1 1936～39

1936年に南京から脱出した後、丁玲は陝北蘇区に向かって疾走した。36年はまだ内戦の最中にあり、共産党と国民党の間にあった「知識人を争う」時勢において、丁玲は初めて国統区から陝北蘇区へ身を寄せてきた名作家として、その行動自体にも重大な意味を持っていた。また、文壇上かなりの影響力のある名作家としての彼女の到来自体が、当時の基層が薄弱で人材が不足している革命根拠地に強力な新勢力をもたらした。熱熱に歓迎された限りではなく、上層部の指導者たち、特に最高の指導者である毛沢東に大変重視されている¹⁴。

要するに、南京で3年間つらい生活していた丁玲は、蘇区でいろいろ暖かく優遇され、再生しようとした彼女は感激のあまり全ての情熱で蘇区の生活に身を投じた。37～39年の丁玲は自らの筆を武器にし、前線で活躍している。共産党の恩に感じて恩返しをしようとし、また抗日前線という大きな「政治テーマ」に合わせるため、彼女は意識して前線の兵士や大衆の中に深く入り込もうとしていた。つまり、この時期の彼女にとっては、抗日熱情を創作に注ぐことが何よりも優先で、心にある軟禁事件の暗い影は一時的に薄くなり、前途は希望に満ち満ちている状態だったと言ってもよい。

2-2 1940～42

1938年康生は党校で「丁玲は南京で自首した」¹⁵と話したため、丁玲の「転向」問題が初めて蘇区で取り上げられた。その後、党内で自分の南京経歴について徹底的に審査して書面的な結論を出せと丁玲は申し出た。1941年に審査の結果¹⁶が出て来た。『結論』の最後に毛沢東が「丁玲同志自首の噂は確かな証拠がないため、成立できない。従って、丁玲同志は相変わらず党に革命に対して忠実な共産党員だと認識すべきだ」という一文が書き加えられた。

その一方、妻は特務であった夫に密告されて売り渡され、逮捕され軟禁された。軟禁時、夫婦同室ということ自体がとても不思議に思われるであろう。更に、女兒が生まれたことで、丁玲の身の潔白も否定された。しかし、36年の時点で丁玲が審査されずに簡単に蘇区に入れ、軟禁の歴史について誰も口をつぐんでふれようとしなかったのに、いまさら蒸し返したのはなぜか。その原因は36～39年蘇区の知識人対策に深いかかわりがあると思われる。36年に丁玲をはじめ、知識人が大量に蘇区におし寄せてきて、革命部隊の様相が変わり続けた。この現象は上層部の指導者たちに、新しい角度で革命戦略を考え直させた。とりわけ、毛沢東はこれが契機だと鋭く気づいた後、39年に「大量に知識人を吸収する方針」¹⁷を制定した。更に、「知識人に対する正しい政策は、革命の勝利を保障できる重要な条件の一つだ」¹⁸と党内と軍隊の指導者たちに注意を促した。当時たくさんの「知識人優遇政策」¹⁹が出された。このような状況は40年までに来ると、武人（軍人）からの不満及び、文人（知識人）との矛盾は緊張した状態になった。しかも、革命の部隊に自然に文人陣営と武人陣営に分けられた。従って、今回の丁玲が当られた非難事件はその武人陣営からの「攻撃」の始まりだと考察することができる。一時期「革命」のグループからの疑い

が次から次へと続いた。また、『結論』が出るまでの一年間、いかなる審査がされたか推測できるであろう。子供が生まれたことにより、夫婦の間でしか分からない「密話」も含む全てを白状しなければならず、自らのプライバシーを多くの人の前に曝け出さなくてはいけなかったことも避けることができなかった。結局、『結論』が丁玲の潔白を証明し、更に毛沢東からの認めを得た。しかし、このつらかった過去が蒸し返されることは、丁玲の心の深くに隠されている古い傷に触れることであった。

2-3 丁玲の創作スタイルの変化

蘇区に辿り着いた 36～39 年の間に書かれた作品を通して、丁玲の創作スタイルが一転した。それは、蘇区の戦闘生活に身を投じ、前線に活躍している丁玲が自らの筆を武器にし、抗日に一致団結して敵愾心を燃やそうとする彼女の創作意識が 36～39 の作品から十分感じられることである。

それに対して、一筋に「革命」というテーマに合わせず、延安社会の問題を浮き彫りにしうるのは、40～42 三年間の作品の特徴だと言えよう。それは、時間がたつにつれ、延安革命に対する深い理解につれ、丁玲は 39 年までの単なる賛美が「40 年から冷静に現実を考えることに変わった」²⁰。その理由は、前述した「非難事件」がきっかけとなり、丁玲が蘇区には現実と理想の間に大きなギャップがあることを悟った²¹からである。従って、39 年までの作品の創作とは異なり、丁玲の意識変革がこれらの作品から窺うことができる。また、「霞村」は 1940 年年末、つまり 1941 年 1 月 1 日の『結論』を待っている間に書かれた作品である。その複雑の心情の元で書かれた作品にほめかしているであろう。

3 「信念」と「霞村」との比較

3-1 弱者らしくない性的被害者のイメージ

周知のように、日中戦争当時の中国が半植民地半封建社会に転落したのちも、女性は依然として封建宗法制度に縛られ、男尊女卑、女性抑圧は依然として女性の地位のもっとも本質的な特徴であった²²。その女性抑圧の代表を代表するのは、何千年に引き続いていいる貞操観念²³によって、女性の性が厳しく禁じられていることである。更に、貞節を失うことは罪だという貞操観念に基づき、女性が死ぬまで強要された。

一方で、レイプされた女性とは、侵略者の犯罪行為を告発し、敵愾心を燃や

す物的証拠であるが、この民族の人にとっては、恥辱で振り返ることが辛い痛みでもある²⁴。そのため、操を失った女性の自殺する行為は彼女たちの自覚的な選択ばかりではなく、男権社会における女性に対する国家や民族の規定と社会的期待だと言える。それゆえ、中国現代文学叙事の手法を見渡せば、男性作家たちによる侮辱された女性の自殺で締めくくるか、また敵と刺し違えて死ぬことを賞賛に値する行為だと評価する手法が一般的²⁵である。男性作家は「死」を通し、女性の操を守るべきことを賛美する。

しかし、貞操を奪われた女性は死ぬべきだという世俗的な考えに逆らい、陳老太婆も貞貞も敵に犯されても、結局従来の小説で期待されているように、死ぬことを従わなかった。この独特な「回帰させる」設定だからこそ、二篇は「レイプされても生きて帰ってきた女性を描く数少ない作品だ」²⁶と高く評価されている。死なないだけではなく、『黄土の村の性暴力』²⁷で述べられている「被害をうけた女性一人一人が、恥ずかしいと思いつけ、自らを責めて忘却の中に閉じ込めようとしてきた」²⁸性的被害者のイメージと大きなずれがある。

ではもっと封建的な貞操観念を犯す危険を冒して、敵の男と「寝た」「不潔」体とともに、村に帰ることを選択した二人の女性の勇気がどこから来たかと問うと、作者たる丁玲は自ら「手本を示した」。36年の時点で、丁玲は周りの「不信」の視線を顧みず、「転向」だと疑われる危険を冒して蘇区に行く決定を押し通したことは、それなりの勇気の反映ではなからうか。更に、作家としての丁玲は、その「勇気」を二人のヒロインに与えている。要するに、二本の作品共に「性的被害者」の素材としたことは、少なくとも丁玲が性的被害者という戦争時代にしかない特殊な女性群に関心と呼び起こしていることを物語っているのではなからうか。

3-2 ヒロイン設定上の相違点

(一) 「老女・保守的」 VS 「少女・革新的」

「信念」に陳老太婆は57歳の中老年女性である以外、彼女の性格や昔の種々のことなどについて、物語にほぼ言及されていない。だが、彼女の年齢、また当時封建思想の色合いがまだ強い山西省の農村という生活環境、更に性的暴行を受けた後、精神に異常をきたしたことなどの手掛かりから、彼女はただの田舎に生まれ育ち、人並みの生活を送っているごく普通の農村の婦女だと推測できる。つまり、男権社会の道徳規範を十分に内面化し、しかも忠実に実行し

ている女性群である。

しかし、同じく農村出身ではあるが、「霞村」の貞貞はこれとは全く異なる。彼女は18歳の若さであり、天真爛漫な性格の持ち主である。彼女は学校教育を受けており、南方人の女性のように読書できることに憧れている。貞貞の昔に関する噂の中で、とりわけ「自由恋愛」、「駆け落ち」、「反抗」のような彼女が「道徳規範から外れた行動」を起こした大事な箇所では、丁玲は言葉を惜しまずに描き出している。婚姻の決定権は完全に家長に握られる当時の中国社会において、貞貞は勇敢に恋を追求している (p. 200)。しかし、恋人との結婚は親に強く反対されても、貞貞が自らの愛情を守るため、彼と駆け落ちしようとした。結局、彼女の真意に、度胸がない彼は答えられなかった。恋人に裏切られるという初恋の失敗はこの少女の貞貞にかなりの打撃を与えられた。だが、決められた相手と結婚させようとする親の期待に、彼女も答えない。その後肉親の情を気にかける壮大なプレッシャーが周囲からかけられた時、彼女は尼僧になろうとした (p. 198)。

要するに、上述した貞貞の一連の道徳から「逸脱した行動」には、彼女をただの平凡な田舎娘で済ませず、「反逆者」として描き出そうとする作家丁玲の意識を読み取ることができる。また、革新的な貞貞という戦時の新しい農村女性像が提供されていると同時に、保守的な陳老太婆とくっきりとした対照をなす。陳老太婆と貞貞を、「老女」と「少女」にした設定も対照的であり、意図的だとも言いたい。陳老太婆は「人妻」であり、つまり慰安婦にされた時点ですでに処女ではなかった。しかし、貞貞は未婚であり、処女である。中国伝統の貞操観念に基づくと、同じく敵側の男性に犯されたとしても、人妻の陳老太婆本当の意味上の「失貞」ではなく、せいぜい「婦徳」を守らなかっただけだ。未婚の貞貞の方が、本格的な意味で貞操を奪われた女だと判定され、もっと許されがたい。このような微妙にずれている「失貞」の判断基準によって、二人の女性を取り巻く違う境遇(後述)に伏線を張る効果が見られる。

(二) 「病的な」陳老太婆 VS 「健康的な」貞貞

陳老太婆は日本軍営から帰ってきた際、「めっきり老けた腐った木片のような顔、魚のような眼がはまって、無言のまま、涙もこぼさなかった、まるで締められた家鴨がピクピク羽を動かすように」(pp: 139-41) という、彼女の外見

に極めて大きな変化を起こした。とりわけ、彼女による「日本鬼子」という恐怖の叫びが周りの家族も読者も、心を驚かされたであろう。更に、ただの外見上ばかりではなく、性格も性暴行のショックで激変した。昔無口であった彼女は、今は日本軍営で見聞きしたものと及び自分の性暴行された経験を繰り返し語る。このような陳老太婆は実に気が狂ったように見える。これらの表現から、彼女は身体ばかりでなく、精神も「病的」に見える。これらの陳老太婆の身に起こった変化は、敵によってさんざんに蹂躪され、心身ともぼろぼろになった性的被害者のイメージ²⁹に合致している。

一方、一年間日本軍営で「働いて」実際に性病にかかっている貞貞は、「手がひどく熱く、

病气らしい気配はなく、つやつやと顔色も良く声もはっきりして、いじけた様子もなければ、ぞんざいな様子もなかった」(p. 201、203)。また、彼女は「世間も見てきた、日本語をも話せるようになった。しかも、日本軍のことを口にするのが平気だ」(p. 200、202)。日本軍営での境遇について、彼女は一切語らないばかりではなく、周りの噂に対しても、彼女は異常に冷静な態度をとり、周りの人に弁解しようともせず、終始「沈黙」している。陳老太婆の「合理的な」被害者のイメージとは対照的、このあまりにも「健康的」、被害者のイメージから大きくずれている貞貞という被害者像に、違和感を覚えるであろう。

要するに、二人の女性像を、「老女、保守的、病的」(陳老太婆)と「少女、革新的、健康的」(貞貞)という対立と、大きな落差を付けるという設定を通して、作家丁玲の意識変革の軌跡を反映していると言いたい。いわゆる、陳老太婆を書き出した39年の時点で、丁玲の中に意識して日中戦争における「性的被害者」という特殊な女性群に注目し始めた。ただ、この時期の陳老太婆という被害者像は、まだ一般的、普遍的な農村女性のイメージに基づいた女性像である。しかし、40年に至ると、彼女の「革命情熱」が冷め、蘇区社会に出ている問題を冷静に考え始めた。しかも、暫く「捨てられた」性別意識の蘇りによって、研ぎ澄まされている目で特殊的、個別的な性的被害者の素材を捉えた。つまり、貞貞という女性像が「登場」すること自体に、「普遍性」から「特殊性」へという丁玲の意識変革が読み取れるとは言えよう。

3-3 両村の被害体験から見る

(一) 西柳村：「共感」

「信念」において、唯一の生存者である陳老太婆は自らの口で、日本軍營での悲惨な境遇を他の村民たちに伝えた。陳老太婆は主人公でありながら、一人称の語り手でもある。彼女の語りは終始ストーリーを貫き、他の登場人物はみな聞き手である。日本軍營での様々な悲劇が、全て彼女の口を通して伝えられる。その陳老太婆の「語り」は、他の村民にとって、自分の親族に関する手掛かりをつかむ唯一の手段である。同時に、陳老太婆が当時の光景 (pp : 171~2) を恐ろしく語ることで、彼らは強く心を打たれ、辛い被害に「共感」を覚えた。それゆえ、陳老太婆の遭遇に同情すると同時に、家族の恨みを晴らしてやるという決心を村全員が抱いた時点で、日本軍を民族の不倶戴天の敵とする「共感」意識が形成される。

(二) 霞村：「妄想」

それに対して、「霞村」において、本当の意味で被害を受けたのは貞貞一人、あるいは貞貞の一世帯だけ (p. 200) である。従って、他の村民にとっては、被害と言うと貞貞一家に起きたことにとどまり、「他人事」のような認識しか持っていない。貞貞が女スパイになる理由に対して、彼らは無関心な態度を示している。かえって村民たちは、彼女が日本軍と「寝た」事実にはひどく注目し、更に彼女の日本軍營での様子をすべて自分たちの「妄想」(p. 198、201) に任せ、村中で噂をまき散らしている。また、村の他の女性にとっては、貞貞がいるために、「自分に対する誇りの念をおこし、いまさらのように自分の純潔を発見したのもあった。自分は強姦されていないからといって威張れるわけなのだ」(p. 204)。従って、「信念」と同じように村全員が共通の敵に一致団結する認識がなかなか芽生えないのは、当然であろう。

以上より、同じく日本軍の性的暴行を経験した二人の女性は、周囲から正反対に扱われている理由を追及するために、両村の村人の「被害体験」が一つのキーワードだと思われる。では上述した両村の「被害体験」、及び二人のヒロインの村における異なる扱われ方の設定には、一体いかなる理由があるのか。それは丁玲自身の経歴に戻らなければならない。「信念」に書かれている村人全体の「被害体験」は、37年日中戦争が勃発した後、戦争にさんざん苦しめられてきた中国人の実態の描写であると、筆者は解釈したい。この戦争被害体験は、

蘇区でも、国統区でも共通している普遍的なことである。一方で、33～36年3年間の軟禁は、蘇区では他に誰も経験したことがない丁玲の「特殊な」経験である。この丁玲の軟禁経験と、「霞村」に他の村人が無事に逃げ出して自分だけ地獄に落ちいった貞貞が性的被害を受け、更に女スパイになった経験の「特殊性」とが、一致しているのではなからうか。また、40年の「非難事件」で軟禁時代の歴史をむし返された丁玲が、蘇区から浮いているような存在になっている。貞貞は女という性ゆえの苦痛、運命の中の犠牲者でありながら他人の同情を得にくく、節を失ったなどと誤解され指弾される苦痛を、丁玲と共有している。それで、物語が孤立し、疎外された貞貞の姿は、今回の非難事件で、現実において周囲に邪推され、誹謗され、心に傷を負った丁玲の姿を暗に示している。要するに、作家丁玲自身の境遇は、二本の小説のまったく異なる「被害体験」の設定と深い係わりがあると言えるであろう。

3-4 クライマックスの設定から見る：「敵が誰か？」

(一)「反復的な」行為：語ること

「信念」は陳老太婆の日本軍の暴行を繰り返して「語る」たびに、クライマックスを迎える。陳老太婆の語りがますますエスカレートしていくにつれて、物語のクライマックスに反復的に現れる。陳老太婆の「語り」によるクライマックスの場面の繰り返しを通して、小説には終始中国対日本、または中国人対日本人のような国家民族の衝突関係ばかり満ち溢れている。要するに、村民たちにとっては、日本軍は敵だということが明らかに描き出されている。

(二)「劇的な」行為：「妻」の座を拒むこと

「信念」に対して、「霞村」のクライマックスは、親戚たちに昔の恋人との結婚を強制させる場面だと思われる。これは作者丁玲の意図的な設定だと言いたい。それは、「霞村」に「信念」と同じような衝突関係の裏に、もう一重の衝突関係が隠されているからである。それは、貞貞と霞村村民との間にある緊張感のことである。

貞操を失って村に戻った貞貞は周りの人たちに排除されている。生みの親までも、貞貞の存在自体が恥だと思っている。また、貞貞が「汚れた女」だという噂が広がったため、合意に達していた縁談が駄目になった。ちょうどこの時、昔の恋人は噂を気にせず、貞貞にプロポーズをした。男権社会で生きている

女性にとって最もよい帰属は結婚、いわゆる「妻」になることである。従って、喜んで貞貞に「妻」の身分を与えようという行為に、「傷物」になったうちの娘を片付けさえできれば、感謝の至りだと思っている貞貞の両親及び親戚たちは狂喜する (p. 201)。しかし、このプロポーズに対して、貞貞は感激して涙にむせびながら承諾せず、更に不遜な態度を見せた。この予想外の貞貞の反応は、村人を怒らせた。この貞貞の反応はもう一度彼女自身が村人たちの非難の標的となる結末を招いた。要するに、貞貞のために、昔の恋人との縁談までもち上げた村人の「熱心な」行動は、この「汚れた女」の「生きること」自体が、なんとか周りの道徳裁判官たちに許されたように見える。だが、自分の「好意」に応じない貞貞の見せた「弱者」らしくはない「強さ」が、周りの人たちを怒らせた真の理由であろう。

その一方、村人が結婚を迫る乱暴な「集団的行為」によって、精神的な被害を与えられた貞貞のことに、昔の恋人までも「なんてつらいことでしょう。いっそ鬼子にさらわれたほうがまだ」 (p. 208) とため息をついた。ついに、積み重ねてきた重圧のもと、ずっと沈黙している貞貞が「劇的に」爆発した時点で、物語のクライマックスが迎える。狂気に近い状況に陥った彼女は、「顔をさんばらに乱した長い髪の中に隠し、眼をぎらぎら見張って、奥のほうからみんなを睨みすえていた… (中略) …囚われた野獣が復讐の女神のようだった」 (p. 206)。この貞貞の姿には、日本軍に対する隠された恨みに加えて、仲間であるべき村民に対する憎しみが満ち溢れている。自らの体を蹂躪した日本軍より、何度も精神上に打撃を与えた村人のほうが、ある意味で貞貞に「敵」視されていることが、ここに表現されている。

この小さい霞村で、「強者」になっている村民たちと、彼らから孤立し、「弱者」の立場に置かれている貞貞との間には、対立な関係が形成されている。貞貞が日本軍によって「性的一次被害」に遭った後、村人から受けた「性的二次被害」、つまり女性が束縛されている身体性を丁玲は捉えている。その「性的二次被害」を直視しなければならないという主張は、この作品に含まれている深遠なテーマだと思われる。従って、抗日戦時に創作された「霞村」には、国家民族大義を宣揚するという表向き of 政治的な意図の裏に、家父長思想によって迫害された性的被害という女性群の生存問題が隠されていると言えよう。1940年から延安社会の現実問題を冷静に考え始めた丁玲の意識変化は、二本の小説が異なる面に重点を置いていることから、その一端を窺い知ることができる。

3-5 異なる再生の道

「信念」にも「霞村」にも、ヒロインの再生の道とも、「革命」と帰結されている。だが、「革命」と係わったその時点で、二人の女性は明らかに異なる再生の道を歩んでしまった。

(一)「語り」で再生

元来お喋りも嫌いな陳老太婆は、自分の話を聞いた村人たちの反応によって、「恐怖を忘れることができ、一種の慰めを覚えた」(p. 143)という精神的な充足を得た。この時こそ、彼女の「語り」に変化が起こる。つまり、彼女は「より人の心を動かす」(p. 143)ために「語り」を加工することを自覚し始める。更に、日本軍と決戦しようとする感情を燃やした村人に、彼女は「入隊(隊に入れ)」をすすめた(p. 147)。しかも、人々は彼女の動員ですぐ応じた(p. 152)と著しい効果が得られた。その後、「入隊」を動員した陳老太婆の「語り」の機能が革命にとっては必要であり、そこに巨大で政治的な機能が潜んでいると婦女会のリーダーは意識したため、彼女を婦女会に編入させた。それは、彼女に公的な身分を与える、つまり一名の女性戦士として、今後公的な発言を語りつけてほしいという党側の考えである。

要するに、「入会」は陳老太婆の運命の転換点である。ところが、「入会」した時から、彼女の「語り」は個人のものでなくなり、政治的な行為に変遷した。しかも、彼女が立つ演壇が、国家権力を展示する場所にもなると言ってもよい。

(二)「身体」で再生

政治上に女性の身体を神格化することは、いままでずっと抑圧されている女性に錯覚をもたらす。彼女たちに、自らの身体は国を救え、功績を立てることに効き目があり、自分が男性のホモソーシャルな世界に入れ、女性としての弱い社会地位と価値判断を抜け出せるという思いをさせる³⁰。一方で、貞操を失っても、死なないという行き詰った境地に陥られ、至急自分に身を預けられる場所を見つけないといけない貞貞の強い願望は、国家や民族のためにスパイになろうと見方の共産党からの要請と、たちまち意気投合した。しかも、婚姻に身を預ける以外の選択肢を提供してくれた。それが、彼女に昔の恋人のプロ

ポーズも断ってまでスパイに身を投じる動機付けとなったと思われる。それで、貞貞は迷わず自分の体を捧げた。こうして、貞貞はがらりと「女スパイ」に変わった。この「変身」は、行き詰まった貞貞にとって、暗やみの中に一筋の光明を見出すように意味重大である。それは、「傷物」の屈辱の身分を被っている彼女に世の中で堂々と生き延びる理由が冠されたからである。

おわりに

陳老太婆も貞貞も、周知のステレオタイプ式の性的被害者イメージを転覆させた。彼女たちは、「汚れた女」だから逃げようともせず、逆にその事実を素直に直面した。二人の女性ともレイプされても死なずに勇敢に帰り、更に女戦士の一名として戦って再生していく。ところが、陳老太婆は自らの「語り」を通して、自分が男性の政治世界に入り、男性並みの戦士として戦うことで、「性的被害者」の「周縁的」な価値判断基準を抜け出すことに成功した。一方、貞貞は「弱者」になることを断わった。彼女は、「妻」の座を拒否して女スパイとして革命のチームに身を投じた。この彼女の選んだ苦難に満ちた道と、彼女は自分なりの生き方で生きていく信念をもち屈しない姿は、貞貞の主体性の表れである。しかし、女一人で生きていこうという彼女の主観的な信念はいくらしっかりしていても、自ら周縁的な立場に退いて生き続けるしかない。一目見ただけでは、二人の女性の異なっている再生の道により、それぞれの違う結末にいき着いたように見える。つまり陳老太婆は周縁から中心へ、貞貞は周縁から更に周縁へ至ったと結論付けられるかもしれない。しかし誰か幸運で、誰が不幸だと結論を下すのがまだ早い。つまり、性的被害の経験を持っていることはこの二人の女性の共通点以外、二人の女性の「異常な」戦い方、つまり「女の戦争被害」を被ったという点では本質的に同じだと指摘したい。それは、革命を応援し、宣伝するために「利用」されたことである。最後に、貞貞は最終的に延安に辿り着いても、延安は霞村と違う光景であり、または霞村との違う扱われ方をされると誰が保証できようか？また、「語り手」として、陳老太婆は自分なりの「語り」の素材、つまり性的被害の経験が備えているから、代わりに他の人の誰もが語ったとしても、彼女なりの効果を取められない。しかし、いつか戦争が終わる日が来て、陳老太婆の「語り」の力を発揮する余地がなくなる時、彼女は どうやって生きていくのであろうか？

「女性」は丁玲文学における深遠なテーマである。日中戦争の際、国家民族

存亡の危機に直面している丁玲は、一時的に閉じた女性を注目する性別意識が再び蘇ってきた。延安初期作品の「信念」「霞村」に「性的被害者」を題材にしたのは、丁玲の中にある女性意識の再現と言えよう。また、「信念」「霞村」の性的被害を受けた二人の女性の全く逆である再生への道の設定に、作家丁玲は戦時中、「軍隊に入る」という行き詰った女性に「避難所」を用意してくれる「神話」の真実を暴いた。その上、「信念」「霞村」は、日中戦争における性的被害者の戦後の問題へと繋がっていくのである。

注

- 1 「涙眼模糊中の信念」（1939年4月執筆、初刊9月『文芸戦線』1巻4号、1944年3月『我在霞村の時候』に収録された際、「新的信念（新しい信念）」と改題された。本稿の底本は『抗戦文学期刊選輯 第二輯 文芸戦線』（書目文献出版社、1939年）所収の版を参照した。邦訳は岡崎俊夫訳「新しい信念」（『霞村にいた時—他六篇』、岩波書店、1956年）を参照した。
- 2 「我在霞村の時候（霞村にいた時）」（1940年執筆、初版『中国文化』2-1（桂林遠方書店、1941年）に収録された。本稿の底本は上述した初版を参照した。邦訳は江上幸子訳「霞村にいた時」（『中国現代文学珠玉選』、二玄社、2001年）を参照した。
- 3 江上幸子「戦時性被害という「恥辱」の語り—丁玲『新しい信念』の語訳と削除から—」、『近きに在りて—近代中国をめぐる討論のひろば—』58号（汲古書院、2010年）p. 32。
- 4 同上、p. 35。
- 5 年代順に代表的なものを挙げる。尾坂徳司『続・中国新文学運動史—抗日戦争下の中国文学』（法政大学出版局、1965年）、檜山久雄「延安時代の丁玲とその文学」（『近代中国の思想と文学』（大安出版、1967年）、袁良駿『丁玲研究五十年』（天津教育出版社、1900年）、張碧紅「丁玲小説中農民形象的变化及特点」（『丁玲研究』1期、中国丁玲研究会、2009年）などである。
- 6 岡崎俊夫「訳者あとがき」、『霞村にいた時』（四季社、1951年）。
- 7 1938年に当時中央党校の校長である康生が「丁玲は南京で転向した」という噂を流した。55年秋にまた、ある人がこの噂を拾い上げ、丁玲らは文芸界の「反党グループ」として批判された。57年、文芸戦線の「大弁論」が行われた時には、丁玲は再批判され、「転向」問題がまた持ち出された。南京で軟禁中の「転向」は、「丁

玲批判」の主な理由の一つだった。

- 8 華夫（張光年）の「丁玲的“復讐的女神”」（『文芸報』3期、1958年）、新島淳良『現代中国の革命認識 中ソ論争への接近』（御茶の水書房、1964年）。
- 9 年代順に代表的なものを挙げる。梅儀慈著『丁玲の小説』（厦門大学出版社、1992年）、王喜絨『20世紀中国女性文学批評』（中国社会科学出版社、2006年）、張碧紅「丁玲小説中農民形象的变化及特点」（『丁玲研究』1期、中国丁玲研究会、2009年）などである。
- 10 同註8。
- 11 年代順に代表的なものを挙げる。王德威「做了女人真倒霉？丁玲的“霞村”經驗」（『想像中国の方法—歴史・小説・叙事』、生活・読書・新知三聯書店、1998年）、常彬『中国女性文学話語流変 1898—1949』（人民出版社、2007年）、劉伝霞『被建構的女性—中国現代文学社会性別研究』（齋魯書社、2007年）、江上幸子「落伍の烙印からの再生を求めて—「涙眼模糊中の信念」と「我在霞村的時候」」（『お茶の水大学中国文学会報』第7号、1988年）などである。
- 12 江上幸子、前掲書（1988年）、p. 170。
- 13 作品の完成度などの考えに基づき、「36～38年」期と「39～42年」期を分けるのは、従来一般的な分け方である。
- 14 涂紹鈞『図本丁玲伝』（長春出版社、2012年）p. 151を参照した。
- 15 同上。
- 16 原文は楊桂欣編の『觀察丁玲』（大衆文芸出版社、2009年）pp：235～36から再引用した。
- 17 毛沢東「大量吸収知識分子的決定」、『毛沢東選集』2巻（人民出版社、1991年）。
- 18 毛沢東「在中国文芸協会成立大会上の講話」、艾克恩『延安文芸運動紀盛』（文化芸術出版社、1987年）pp：2～3。
- 19 侯桂花「抗日戦争時期中国共産党的知識分子政策及作用」、『上海党史与党建』4月号（2010年）。
- 20 江上幸子、前掲書（1988年）、p. 170。
- 21 …（筆者略）…感情因为工作的关系，变得很粗，与初来时完全两样，也就缺乏追述的兴致。丁玲「我怎樣来陕北的」『丁玲全集』5（1939年執筆、河北人民出版社、2001年）p. 131。
- 22 中華全国婦女連合会・中国女性史研究会編訳『中国女性運動史 1919—49』（論創社、1995年）p. 4。

- 23 同上、p. 5 を参照した。
- 24 劉伝霞、前掲書、p. 75。
- 25 同上、p. 73。
- 26 同上、p. 77。
- 27 石田米子・内田知行『黄土の村の性暴力』（創土社、2004年）。
- 28 江上幸子、前掲書（2010年）、34頁。
- 29 秋山洋子『戦争与性別—日本視角』（社会科学文献出版社、2007年）pp : 198～99
を参照した。
- 30 劉伝霞、前掲書、p. 69。